

# 一世お鯉

長谷川時雨

青空文庫



「そりやお妾めかけのすることじやないや、みんな本妻のすることだ。姉さんのしたことは本妻のすることなのだ」

六代目菊五郎のその錆さびた声が室の外まで聞える。

真夏の夕暮、室々のへだての襖ふすまは取りはらわれて、それぞれのところところに御簾みすや几帳きちょうめいた軽羅うすものが垂たらしてあるばかりで、日常つねの居間いままで、広々と押開おしあかれてあつた。

打水うちみずをした庭の縁を二人三人の足音がして、白地の筒袖つつぽの浴衣ゆかたを着た菊五郎が書生流りゅうに歩いて来ると、そのあとに楚々そそとした夏姿の二人。あつさりと水色の手柄——そうした感じの、細つそりとした女は細君やすこの屋寿子やしこで、その後うしろは、切髪きりかみの、黄昏たそがれの色にまがう軽羅うすものを着て佇たんだ、白粉おしろい気のない寂しげな女。

「ほんとに姉さんつまらないや、そんなことをしたつて」

主人はそういつて、今までのつづきであつたらしい会話かいわのきりをつけた。

切髪の女は、なよやかに、しかも悩ましいほほえみを洩もした。すなおな、黒々とした髪

を、なだらかな、なまめかしい風もなく髻を堅く結んで切下げにしていた。年頃は三十を半ばほどとは考えさせるが、つくろわねど、この美貌ゆえ若くも見えるのかも知れない。といつて、その実は老させて見せているかも知れない。ほんのりと、庭の燈籠と、室内にもわざと遠くにばかり灯させたのが、憎い風情であった。

「お鯉さんです」

そうであろうとは思っていたが――

切髪の女は小さい白扇をしずかに畳んで胸に差した――地味な色合――帯も水色をふくんだ鼠色で、しよいあげの色彩も目立たない。白い扇の、帯にかくれたさきだけが、左の乳首の下あたりに秋の蝶のとまったようにびったりと……

黒い夜空においそめた明星のように、チラリチラリと、眼をあげるたびに、星のような瞳が輝き、懐しいまたたきを見せる。唇と、眼とに、無限の愛敬を湛えて、黒いろ紹の、無地の夏コートを着て、ゆかしい印象を残してその女は去った。

「ほんとにあの女は、良い人間すぎてね」

それは誰れやらの老女の歎息であった。

一世お鯉——それは桂さんのお鯉さんと呼ばれた。二世お鯉——それも姐さんの果報に負けず西園寺さんのお鯉さんと呼ばれた。照近江のお鯉という名は、時の宰相の寵姫となる芽出度き、出世登竜門の護符のようにあがめられた。登り鯉とか、出世の滝登りとか、勢いのいいために引く名ではあるが、二代揃つての晴れ業は、新橋に名妓は多くとも、かつてなき目覚ましいこととされた。

照近江のお鯉——あの、華やかに、明るく、物思いもなげな美しかった女が、あの切髪姿の、しおらしい女人かと思ひめぐらすときに、あまりに違つた有様に、もしや違つた人の頁を繰つて見たのではないかという審しみさえも添つた。

わたしの心に記憶する頁——それには絵もある。またおぼえ書きもある。みんな岡目から見たもの聞いたものにすぎないが、わたしはその人自身から聞くよりさきに、その覚え書きも持出して見ようとしている。

奠都三十年祭が、全市こぞつて盛典として執行されたおり、種々の余興が各区競つて盛大に催された。とりわけ花柳界の気組は華々しかった。世はよし、時は桜の春三月なり、聖天子万機の朝政を嚮すによしとて、都とさだめたもうて三十年、国威は日に日に伸びる

悦賀よろこびをもうし、万民鼓腹して、聖代ことほを寿ぐ喜悅たのしみを、公おおやけにも、しろしめせとばかり、あ  
 るほどの智恵囊ちえぶくろを絞り趣向して、提灯ちようちんと、飾物かざりものと、旗と幔幕まんまくと、人は花ちまたの巷  
 を練り歩くのであった。ことにそのなかに、面白き思附おもひき、興ある見物みものとして大名行列が  
 あつた。それは旧大名の祿高ろくたか多く、格式ある家柄の参覲さんぎんこうたい交代の道中行列にならい、  
 奥向の行列もつくつたのであった。衣裳いしやう調度は出来るだけ華美に、めざましいほどに調  
 えられた。その人数には、俳優、芸妓、旦那衆、画家、芸人、噺家はなしか、たいこもち、金に  
 糸目をつけぬ、一流の人たちが主な役柄おもに扮し、お徒歩かち、駕籠かごのもの、仲間ちゆうげん、長持ながもち  
 かつぎの人足にんそくにいたるまで、その身分々々によつて肝煎きまひりをした。真にまたと見ることの出来ぬと思われ  
 ほどの思いつきで、赤や浅黄あさぎの無垢むくを重ね、上に十徳じつとくを着たお坊主ぼうずまでついて、銀の道  
 具のお茶所まで従がつていった。

その行列が通るのをわたしは柳橋で見た。勿論土地の売れつ妓こたちは総縫そうぬいの振袖や、  
 袿うちかけを着た、腰元や奥女中に、他の土地の盛り場の妓おんなたちと交つていたので、その通行のお  
 りには大変な人気であつた。

柳橋の裏河岸がしの、橋のたもとから一、二軒目に表二階に手摺てすりのある、下にちよいと垣を

結うた粹いぎな妾宅があつた。裏へ抜けければ、じきに吉川町へ出て、若松家という古い看板の芸妓家へとゆくことが出来るようになっていた。妾宅のあるじは若松家の初代小糸といつた女ひとで、お丸さんという名であつた。その時分若松屋には三代目の小糸という雛妓おしやくも、お丸という二代目も出ていた。——（そのお丸さんはいま、稀音屋きねや六四郎の細君になつてゐる）妾宅の方のお丸さんは、すらりとした人で、黒ちりめんの羽織のよく似合う、そんな日でも、別にめかしてもいなかつたが、人好きのする美人で、足尾あしおの古河市兵衛氏の囲いものだつた。その二階に招よばれて、わたしは綺麗な女たちを面おもうつりするほど多く眺めた。

その行列の、美しい御殿女中のなかに、照近江のお鯉も交つていたのか、ほどなく、わたしは一枚の彩色麗しい姿絵を手にした。桜のもとに短冊をもっている高島田の、総縫の振袖に豎矢たてやの字、鼈べつこう甲はなこうがいの花、笄はらうちも艶ならば、平打の差しかたも、はこせこの胸のふくらみも、緋ひぢりめんの襦袢じゆばんの袖のこぼれも、惚ほれぼれ々とする姿で、立っているのだつた。それ以来、わたしの心のおぼえ帳には、美しき女お鯉の名が消されぬものとして残つた。

「横浜の野沢屋さんの大奥おおおくさんからおつかいもののございますの。なんでも六代目さんなんぞは、「お母さん」というふうにお呼びなすつてるようですね。尊敬あがめてなので御座いましょうけれどね」

その遣いつかいものが、衣服の時があり、手道具の時があり、褥しとねの時があり、種々さまざまであるけれども、使いは同じ人にさせているということ、女小間物屋こまものやさんは語った。

「羽左衛門うざえもんさんのところと、梅幸ばいこうさんのところと、それから六代目さん。六代目さいわいちようさんは附属だんななんですね。そりや火鉢ひばちだつてなんだつて、拵こしらえておあげになるのです。たいした檀那だんなでございますよ」

泉鏡花さんの「辰巳巷談たつみこうだん」に出てくる沖津おきつのような、江戸ツ子で齒ぎれのよい、女でも良いものばかりを誂あつらえられて納めようというおめさんが、自分の吐いた煙のなかで、ちよいとさげすみ笑いをしたが、

「だが、お鯉さんは好い氣風きふうでしてね。馬鹿だなんていう奴やつがドサの慾張りなんですよ。そりや利きればなれがよくつてね、横浜からの遣いものなんざ、貫もらうとすぐに、来たもの徳とくで、こんなものやろうかつてやつちやうんですからね、さっぱりしたものでさあ。知れた



つてすこしも恐れるんじゃないから好いでしよう。あたしやあ好きでしたね。お使いにたつて持つてくときもありましたが、見ていてグツと溜飲りゅういんがさがつちやうので、かまうもんですか、やつちやいなさいよ。旦那がやかましく仰しやりや、またこしらえさせますからさつて、唆唆しかけたものでさあ」

といいながら、器用に、ポンと音をさせて煙管キセルの吸殻すいがらを吐月峰はいふきへはたいた。

「けれどお鯉いさんもたいていじやなかつたのですよ。一体無頓着むとんちやくなのに、橘屋たちばなやときたら、そのころはしどい借金だつたのですからね。厭あきもあかれもしやあしないでしょうが、母親が承知しない。それや羽左衛門のおつかさんは実に好い人で、どっちでも向いていろという方を向いている人でしたけれど、お鯉いさんの方が承知しやあしません。もともと市村いちむらへやつたのは、浮気をさせておいては、いつまでも止めないから、一度嫁にやつてしまおう、そしたら、なんぼなんでも、いくら惚ほれてるからつて、あの貧乏じやお尻が落附くまい、かえつて思いきらせるには好いからつて魂胆で嫁やつたんだつて言いますものね。嘘じやあないでしょうよ、なにしろ強しつかりしていますからね、養母つていう方ほうが。——ええ、二人ありますとも、お母さんを二人しよつてるのですから、あの女ひとも大変ですよ。おまけにお母さん次第になるのだから」

売れつ妓のお鯉が、洗い髪のおつまが坐らなければならなかった市村の家の、長火鉢の前におさまった当時の様子が、おゞさんの言葉によって見える。おつまは失意の女として、さんじゅつけんぼり三十間堀のある家の二階から、並木の柳の葉かげ越しに、お鯉が嫁入りの、十三荷の唐草の青いゆたんをかけた荷物を、見送っていたのだときいている。やがてお鯉も、自分と同じ運命になるだろうと思つたと言つたというが、お鯉もまた二、三年すると、その、長火鉢の前の座布団の主として辛抱することが出来なかつた。恋女房であろうとも、家の者となればあしらいも違う、まして人気商売ということによって、いかな口実もつくられる。その上に内所は苦しい、お鯉のお宝は減るばかりだつた。そこで見て見ぬふりもならぬとなつたのは、養われなければならぬという二人の老母の、ひそひそ話の結果であつた。

去るものは疎し——別離は涙か、嘲罵か、お鯉は昔日よりも再勤の後の方が名が高くなつた。羽左衛門のお鯉さん、桂さんのお鯉さんとよばれる一代の寵妓となつた。先夫が人気の頂上にあつた羽左衛門であることも、後の旦那が総理大臣陸軍大将であることも、渦巻の模様を中心となつた流行ツ児の俳優——ニコポン宰相の名を呼ばれ、空前とせられた日露戦争中の大立物——お鯉の名はいやが上に喧伝された。

「どうしてどうして現今のおはるさん（羽左衛門の細君の名）は働きのものです。それは自分の持つて来たものはあるけれど、どうしても養母さんが強かりしているから、なくなさせやしません。あの細君が来てから、不義理はみんなかえしたのです」

羽左衛門が年少で、わざ芸も未熟であり、給料も薄く、そして家には先代以来の借財が多かった時分に、身の皮まで剥いて尽したのが洗い髪のおつまである。ままにならぬ世を果敢かなんだ末に、十八の若旦那市村は、身まで投げたほどだった。おつまはその心にほだされて、ありとある事を仕尽したが、結局はお鯉が嫁入りするようになった。もうそのころ羽左衛門は昔日むかしの若造でもなければ、負債があるとはいえ、ひっぱりだご風の青年俳優であった。またその次の細君の時代は、羽左衛門の一生に、一番は覇を伸しかけた上り口からで、好運な彼女は、前の人たちの苦心の結果を一攫いっかくしてしまつたのであった。

「お鯉さんときたら、あんまり慾がなくて、だらしないくらいでしたからね、あれじゃとても羽左衛門は立ちませんでしたあね。なんしろ手当り次第にやつちまうのでしたからね。誰れか下の者が訪ねてゆくでしょう「お前に何かやりたいねえ」というと、何処からか到来物らしい、新しいラッコの帽子を、そらきた、とやるのですからね。一事が万事で

大変でさあね」

猫背ねこせな三味線の師匠は、小春日和こはるびよりの目を背中にうけた、ほっこりした気分で、耳の穴を、観世かんぜ縫ぬいでいじりながら、猫のようにブルブルと軽く身み顫ふるいをした。人気俳優の家庭を知っていることに聴手ききてが興味をもつであろうと思つて、そのくせ自分はキョトンとして居睡いねむりの出でそうな長閑のどかな顔かほをしていた。

すると、太棹ふとしざおの張代ちやうだいえを持つて来て見せていた、箱屋とも、男衆とも、三味線屋ともつかない唐棧とうせん仕立じだての、声のしやがれた五十あまりの男がその相手になつて、

「なにしろかまわずお金も借りたというじやありませんか」

といつて、サワリを一生懸命に直していた。

「そりやあまあ、本ただか嘘だか知らないがね」

「いいえ、旦那の知らない借金が、いつの間にか増えているんだそうですよ。あのずぼらやさんが吃驚びつくりなんだから、輪をかけた呑気のんきな女だつたと見えますね」

「これを着ておいでつていうと、紋付だろうがなんだろうが、其処にあるのを手あたりまかせだつたというからね」

「お氣に入ると儲もうかつたのだがね」

しやがれた声はカラカラと高く笑った。

「しかし、たいしたものだつて言いますよ。麻布のお宅というのはね、あの女の居間の天井は、古代更紗で張つてあるのですとさ、それが一寸何円てしようつていうのだから剛勢じやありませんか、何しろ女に生れなけりや駄目ですね」

「だが、やつぱり二人老母が附いてるのだろう」

「そいつが厄介ですね、別にすぐそばに一軒、家が建つていますがね」

わたしはぼんやりと、そんなことも聞いていた。

やがて日露戦争は終局に近づいたが、それに従つて国内の景況は不穩になつて来た。いわれなき講和、償われぬ要求であると、内閣不信任は喧しい喧噪となつた。寵妾お鯉の家に大臣は隠れているといつて、麻布の妾宅焼打ちを、宣伝するものがあつた。日比谷には騒擾が起り、電車焼打ちがあつて、市内目抜き場所の交番、警察署、御用新聞社の打壊しなどがはじまり、忠良なために義憤しやすき民衆は狂暴にされ、全市に戒嚴令が布かれて三々五々、銃をもち剣を抜いた兵士が街路に屯し、市中を巡羅するようになった。無辜の民の幾人かは死し、傷つけられ、監獄につながれたりした。その騒動に、お

鯉は何処にかくれていたか、もとより彼女の家は附近に隙間なく護衛が配置されてあった。

その頃のお鯉は出世の絶頂で、勢いは隆々としていた。多くの政客も無論出入していた。大阪の利者岩下は最も頻繁ひんぱんに伺候していた一人である。

秋風一度吹いて、天下の桂の一葉は散った。その大樹のかけによつて生ていたものは多かつた。そして凋落ちようらくをまぬがれなかつた。被うものがなければ日の目はあからさまである。冷たい霜も降る、しぐれもわびしく降りかかる。木こがらし枯も用捨なく吹きつける。さしにも豪華をうたわれた岩下氏もある事件に蹉跌さてつして囿れいごにつながれる運命となつた。名物お鯉も世の憂うれきをしみみどさどらなければならなくなつた。

五万円の遺産分配——それは名のみ、お鯉のために分けられたというよりは、公爵の遺児で、表面夫人の手には引きとられぬきわに出来た、泰三、正子、の六歳と九歳になる子たちを、引取つて育てていたからのものであつた。お鯉はそのために切髪とならなければならず、思いもかけぬ子に母とよばれなければならぬことになつた。そうした考かんがえ慮ごが、お鯉自身から生れようか、生れるはずがないのである。

柳橋に、一藤井いちふじいという、芸妓を多勢抱かかえている家があつた。その、あんまり名も知れない抱え芸妓のひとりだが、どうしたことか桂公のおとしだねだということが知れた。そ

んな始末もお鯉がするようになった。妹ともよんでよい年頃の女に母と呼ばれて、お鯉はどんな気がしたであろう。その女をとにかく一いっかど角の令嬢仕立にするまでお鯉の手許てもとにおいた、そして嫁入りをさせて安心したといつた。しかしやがて五万円は諸々もろもろの人の手によつて手易たやすく失われてしまった。

「お妾のする仕方じゃない」

それらを考えるときに、その言葉が生いきてくる。

そのころのお鯉の生活の逼ひっばく迫が、おメさんの口から、ちらりと洩もれられたことがある。「金にあかしてこしらえたものも、こうやつて二束三文に手離しておしまいなさるんですよ。お気の毒さまですね、お邸こそ以前もとのままですけれど、おはなしになりませんやね。いまじや米屋が強こわもて一面で催促していることもありますものね」

おメさんにも多少の感慨はあるか、金の義齒いればのチラリと光る歯で、四分一の細い吸すい口くちをくわえたまま、眉間みけんにたて皺しわを二本よせて、伏目ふしめになつていた。

「お髪くしのものなものにも、あれじやもう入りません。けれどおかわいそうです。あの気性きせいじやたいへんです」

その折り、麻布の家に一人の青年がいて、その人が一人お鯉のことに誠実を尽してやっているといった。またしばらくたつてから来ると、こんどはその青年が、下にもおかずもてなされているらしいことを語った。

「食事でもなんでもお上<sup>かみとお</sup>通りで、お鯉さんとひとつに食<sup>たべ</sup>るのですよ。あの方が身<sup>たて</sup>を立てあげればだが、お鯉さんもそれまでにはまた一苦労ですね」

と、隠居たちが派手なしきたりや、お鯉自身もどんなに困つても昔<sup>むかし</sup>時の通りだということ、どうしようもないように呺<sup>つぶや</sup>くように話した。

おメさんは、お鯉の真実の親は、ほんとには誰だか分らないのだとも言った。清<sup>きよもと</sup>二元倉太夫の子だというがそれは貫<sup>もら</sup>いつ児<sup>こ</sup>で、浜町花屋敷の弥生<sup>やよい</sup>の女中をしていた女が、藁<sup>わら</sup>の上から貰った子を連れて嫁入ったのだとも言った。

「お鯉さんは清元が上手ですよ、養父さんがしこんだんですからね。十三くらいに、弥生さんの手伝いをしていて、それから花柳界へ出たのです。豪勢な出世もしたかわりに、これからが寂しいでしょうね、肩の荷のなくなった時分にや、もう老<sup>ふけ</sup>込んでしまいますからね」



名物お鯉の後日譚は、膾なますになつても生いきづく作りのピチピチとした生のいき好いものでなければならぬと、わたしはひそかに願つていた。すると、かなしいことにお鯉は永平寺の坊さんの、大黒だいこくになつたという腥なまぐさい噂うわさを聞いた。おやおやと落胆してしまつた。

願うのではないが、有為の青年と、真に目覚めざめた、いままでの生涯に、夢にも知らなかつた誠実を糧かてにして、遺産は子供と母親たちに残して、共に掌てに豆をこしらえるふうになつてしまつたときいたならば、わたしはどんなに悦んだであろう、それこそお鯉さん万歳となえたかも知れない。しかし、いかに、暖かい褥しとねにじつとしていたからとて、母親の御意のままになるがよいとて、人もあろうに出家の外妻とは、どうした心の腐りであろうと、好きな女であるだけに厭いやさが他人ひとごとではないような気がした。とはいえ坊さんにだからとて恋がないとはいえないと弁護をして見ても、お鯉がその青年を捨すててまで、または捨られたとしても、それにかえるに老年の出家を選もう訳がない。そこにはどうしても物質から来た賤いやしい目的が絡からまなければならぬ。

彼女は大森にいと伝えられた。生なまむぎ麦にかくれているとつたえられた。鎌倉に忍んでいると伝えられた。

多恨なる美女よ、涙なしに自身の過去すぎこしかたをかえりみ、語られるであろうか。わたしはあまりに遠くから聴き、また見た記憶のまぼろしばかりを記しすぎた。近づいてあきらかに今日の彼女を知らなければ心ない噂と、遠目の彼女で全体をつくってしまふ恐れがある。折よくも彼女は彗星すいせいのようにわたしたちの目の前に現われた。銀座のカフェー、ナショナルは彼女が新あらたに開いた店だということである。わたしは其処へ行って、親しく、近しく、彼女の口から物語られる彼女を知ろうと思う。

## 三

大正九年も終る暮の巷ちまたを、夕ぐれ時に銀座の、盛さかんな人渦ひとうずの中を、泳ぐというより漂つてわたしはいった。

クリスマス前の銀座は、デコレーションの競いで、ことに灯ひともし時の眩めまぐるしさは、流行の尖端せんたんを心がけぬものは立入るべからずともいうほど、すさまじい波なみが響こよみうねっている。これが大都会の潮流なのだろうと、しみじみと思わせられながらわたしはゆく

今年の花時、花が散るとすぐあとへ押寄せてきた、世界大戦後の大不況のドン底の年末  
 だとは、銀座へ来て、誰れが思おう、時計に、毛皮に、宝石に、シヨールに、素晴らしい  
 高価を示している。そしてその混雑の中を行く人は、手に手に買物を提げている。高等化  
 粧料を売る資生堂には人があふれている。それも婦人ばかりではない、男が多かった。関  
 口洋品店は流行のシヨールがかけつらねられて、明るさはバリーなどを思わせるようで、  
 その店も人でざわざわしていた。美濃常では、帽子や、手袋や、シャツや、どれが店員な  
 のか客なのか、見分けられないほどに黒く白かった。わたしはその中をぼんやりと歩いた。  
 華やかな笑い声がきこえる。はつと我にかえると羞明しい輝きの中にたっている自分を  
 見出した。そして前には美しいシヨールの女の五、六人が、中を割って、わたしを通して  
 行きすぎた。すぐまたその後へ、キチンとした洋服の、すこしも透のない若紳士の群れが  
 来る。わたしはしどろもどろである。乾いて来た洗髪にピンがゆるんで、束髪がくずれ  
 てくる煩さが、しゃつきりして歩かなくなつてはならない四辺と、あんまり不似合なのに気  
 がつくつと、とつて帰りたいようになった。

三丁目で、こんな店も銀座通りにあるかと思うような、ちよつとした小店で、眉毛を剃  
 ったおかみさんが、露地口の戸の腰に雑巾をかけていた。聞きよかろうと思つて、カフ

エーナシヨナルは何処ですかと問うと、

「知りませんねえ、そんな家は。カフェーっていう洋食やならありますけれど」

わたしはまた、銀座通りの店にこうした女房おかみさんもあるのかと、お礼を言つて離れた。

おわりちよう

尾張町の交番でたずねると、交番の巡査は知らないと言つた。すると直傍すぐそばに、青に

白の線のある腕章をつけた交通巡査がいて、

「あるある、出雲町いずもちようの交番の裏だ」

と深切におしえてくれた。わたしはこのごろ、こうした事を巡査や交番で聞くことが、大層自然になつて、すこしも気まりが悪かつたり、嫌な思いをすることがなくなつた。ただ、裏という言葉はハッキリ聞いておかなかつたのを不安に思つた。

間もなく出雲町の角の交番の前へたつたわたしは、丁寧におじぎをしていた。

「この交番の裏ときいて参りましたが、この横町に御座いますでしょうか？」

すると若い、いかにも事務に不馴ふなれのような巡査は、全く当惑したように固くなつて、わざわざ帳面など繰りひろげて見たりしてくれした。わたしは光りの流れてくる資生堂（食堂）の明るい店内を見ていた。白い着物が寸分の絶間なく動く、白い皿が光る、ホークとスプーンとがきらめく、熱い飲料の湯気が暖かそうにたつ、豊かそうに人が出たりはいっ

たりする。わたしもあそこへ腰をかけて、疲れを癒<sup>いや</sup>して、咽喉<sup>のど</sup>もうるおして、髪でもかきあげて訪<sup>たず</sup>ねるところへゆくでしょう。それにあすこで聞けば直<sup>じき</sup>に分るであろうと、そうしようとするど、

「向うの横へ曲つて、そして右へいつてごらんさい。たしかそんな家があつた気がする」親切に、一生懸命考えてくれて、すこし曖<sup>あい</sup>昧<sup>まい</sup>ではあるが、そうらしいからと教えてくれた。それを聞くとわたしは、裏というのは後を意味しているであろうことや、資生堂の暖かそうな飲<sup>のみ</sup>料<sup>もの</sup>は、理窟<sup>りくつ</sup>なしに捨ててしまつて「違つているぞ」と承知しながら、その方へむかつて歩みを運ぶのであつた。

築地<sup>つぎじ</sup>の海軍工場がひけたのであろう。暗い方から明るい方へと、黒い服のかたまりが押して来た。せまい歩道の上は、この人たちの列で、気の弱いものは圧倒され、たじろいで立つて待つていなければならなかつた。若い娘たちは、下駄の齒をならして、おなじように厚いシヨールを前に垂らして、声<sup>こゝろ</sup>高<sup>たか</sup>に話合つてゆく。まるで疲れを知らないようであるが、あの明るい町を突つ切つて、暗い道にひとりひとり散らばつてからは、どんな心持ちであろう。現在のわたしがそうした状態なのだが――

三十間堀に巡査の教えた家があるはずはなかつた。わたしはぐるりと廻つて新橋のた

もとへ出た。その角にあるカフエーの横の扉とびらに、半身を見せて佇たたずんでいる給仕女ウエートレスがあったので、ためらわずに近寄ってきくと、その娘は気軽くて優しかった。こちらからゆけば資生堂の一、二軒手前で、交番のじき後ほほえになっていることを、すこし笑いながら言つて指差して知らせてくれた。わたしも微笑ほほえましくなった。若い娘さんに若い巡査さん、どつちも良い人で、好意をもってくれたことを感じた。娘さんにお礼をいって、笑いながら別れて、ぐるりと廻つて交番の近くまで帰つてゆくのに、先刻おしえてくれた巡査の目にとまりたくないと思つた。折角の好意が無になつて、妙なことになるであらうと思ひ思ひ行つた。

冬ふゆもや霽あわてが紫にうるんだような色の絹のカーテンが、一枚ガラスの広い窓に垂れかけられて、しつとりと光つているところに金文字でカフエーナショナルと表わしてあつた。外飾りなど見るひまもなく、周章あわてで、扉の口へとびこんだ。カフエーへだとして、飲料のみものがほしければはいりそうなものであるが、若い人の、歡樂境がんこのようにされてるそうしたところへは、女人おんなはまず近よらない方がいいという、変な頑固がんこなものが、いつかわたしのめんどくさがりな心に妙な根をはつているので、不思議なはにかみを持つて扉の中へはいった。

下足げそくにお客でないことを断つて来意を通じてもらうと他の者が出て来た。また繰返していうと、こんどは緋かすりの羽織はかまに袴はかまをつけた、中学位な書生さんが改めて取次ぎに出た。わたしはぼんやりしながら、三度目の繰返しをした。当の主人公は知っていても、此処の周囲の人たちは、変な来訪者だと怪訝けげんに思ったに無理はない。

分前わけまえ髪がみの、面立おもたちのりりしい、白粉おしろいのすこしもない、年齢よりはふけたつくりの、黒く見えるものばかりを着た、しつとりとした、そのくせ強しつかりとしたところのある、一目に教育のあることの知れる婦人が出て、あいにく逢えないことを詫わび、明日の時間のことについて、二言三言丁寧な挨拶あいさつがかわされた。わたしはその方との打合せでほつとした。カーテンのうしろの卓には、お客もあつたであろう、二階の階段の下には、一かたまりになつて美麗な女たちもいた。いつまでも硝子戸ガラスを後にして立っているわたしの背は、歩道からまる見えであると思うと、厚かましい気がしてならなかった。

さてわたしは此処で、明日にうつるまえに一筆しておかなければならないのは、お鯉を書こうとするに、その人の近事をあまりしらすぎる。わたしはナシヨナルで応待した婦人を、店の商業の方には、すこしも関係のない、子たちの家庭教師であろうと、勝手にそ

う思っていた。あとで人にはなすと、『都新聞』<sup>みやこ</sup>を読まないのかと言われた。わたしは『都新聞』を読んでいなかったので困ったが、お鯉さんの妹で、大変強<sup>しつ</sup>かりもののおかみさんが、帳場を一切処理しているというから、その婦人でしょうと、その人は言った。勿論それはあとで書くことと前後して、わたしも妹御<sup>ご</sup>だと知ったあとゆえ驚きはしなかったが、わたしはこれから、この奇<sup>く</sup>しき姉妹と卓をかこんで、打解けた物語をしたあらましを書いて見よう。

## 四

その日は前の日と違って、雨がかなり激しく降っていた。ずっと前に降った雪が解け残って、裏町の日かげなどに汚なくよごれて凍っているのを、洗いながすように、さほど寒くない雨であった。気温は冬としてはゆるんでいた。わたしは人力車を約束の十一時までに着くように急がせた。

まだ店の窓にはすっかり白い幕が下げてあって、扉<sup>とびら</sup>の片っぽだけ白い布があげてあった。朝のことゆえ遠慮なく戸口を開<sup>あ</sup>けてはいり案内を乞<sup>こ</sup>うた。



店の中は——白い布を、扉の半開きだけあげた店の中は、幕開き前とでもいうように混沌こんとんとしてゐる。睡眠気分三、夜明け気分七——昼間がちらと、差覗さしのぞいてゐるといった光景であつた。わたしは思いがけぬ「カフェーの朝の間」というところを見て、劇場の舞台の準備を眺めてゐるような気持ちで佇たたくんでゐた。

昨夜は気がつかなくなつたが、大方外に立てかけられてあつたのであろう。クリスマスデナー開催の立札の、框張りの大きなのが立かけてある。食券三円云々とするしてあつた。階段の上り口には赤い紙に白く、「世直し忘年会、有楽座において」とした広告ビラが張つてあつた。

鳥打ち帽に縞しまの着物の、商人の手代らしい人も人待ち顔に立つてゐた。奥の方から用談のはてたらしい羽織を着た男が出て来て、赤い緒の草履ぞうりを高下駄たかげたに穿はき直して出ていった。わたしは取次ぎをまつて佇んでゐた。

何処どこの珈琲店カフェーにもある焦茶こげちやの薄絹うすだけを張つた、細い煤竹とぼりの骨の、帳ついたてと対立たいたいとを折衷せちゆうしたものが、外の出入りの目かくしになつて、四鉢よひばばかりの檜葉ひばや槇まきの鉢植ひちくえが、あんまり勢いよくはなく並べられている。その後には白蠟石しろろうしの小卓こたくが幾個か配置ちへいされてゐる。その卓のつつきの一つで、小柄な娘がナフキンを馴なれた手付きでせつせと畳んでゐる。頸くび

に湿布しつぷの繻帶ほうたいをして、着流しの伊達だてまきの上へ、緋ひの紋ちりめんの大きな帯上げだけをしょっている女は、掃き寄せを塵取りちりとりにとったりして働いていた。やがて、お酒と、煙草と、夜更よふかしと、おしやべりとで、声がつぶれてしまったのであろうと思われる、不思議な調子の若い男が、短衣ちよつきで出て来て、キヤラキヤラした声で来意をたずねた。

短衣の小男は人気者と見えて、すこしの間にみんなから話しかけられていた。階段の下の、酒場の掃除をしている二、三人の娘たちは、その男の名をケンチャン、ケンチャンと呼んでいた。

酒場の娘の一人はこんなことをいつていた。

「随分飲んだわ、なんとかいっっちゃ一ぱい、かんとかいっっちゃあ一ぱい……」

「……あたしね、一万円あれば八千円で帯を買って、あとの二千円は……とかする」

ケンチャンがその時なかなか面白いことを言ったに違いなかった。みんな元気に機嫌きげんよく笑ったが、聞きつけないものには、何をいつているのか、あんまりな上声うわごえで、まるでわからなかった。すると、ナフキンをたたんでいた娘が、

「ライオンは多田さんという人がいるのよ、そりや面白いってっっちゃないの、（よくって多田さん、それじゃこれ無代ただよ、無代ただよ）ってみんなが言うのよ」

それが、言う人には非常に興味ありげであった。そのとき黒い服を、ちゃんと身につけた給仕長らしい男が迎えに出た。そしてわたしは二階に導かれた。

表二階の食堂を通りぬけると、間の室へやは二階の給仕娘の控室であるらしかった。

裏階段のあるところで、四、五人が着物を着たり身づくろいをしていた。わたしは其処そこも通りぬけて、奥まった別室へ通された。

手はこびの暖すとうぶ炉ろがはこばれた、温あつたかいお茶もある、新聞もある、心地よい長椅子もある。しかし土曜の午後を楽しんで鶴見つるみへ一緒にゆく事になっているちいさい甥おいが、学校でさぞ待っているであろうと思えば、心閑のどかにしている間が、おいしい気がするのだった。室へやの隅には二枚折りの金きん屏びょうに墨絵、その前には卓に鉢植ぼけの木瓜ぼけが一、二輪淡紅つぼみの蕾つぼみをやぶつていた。純白な布の上におかれた、小花瓶しょうじょうひんの、猖々しょうじょう緋ひの真紅の色を、見るともなく見詰めていた。

控間では一時騒さわめいていたが、

「貴女もお湯にいらつしやる」

「ええ」

「じや御一緒に行きますから待つて頂戴ちようだいな」

静かになつた。すると、此家ここでか、または裏の家でか、下の方の裏で物音がした。

「お風呂がもう沸きますが……」

「自動車になさいますか、おくるまになさいますか？」

下男といつた調子に聞えた。やがて何処からともなく、お皿やホークの音が、時々ガチャガチャと聞えた。

もう朝じやあない、此店ここでは商業をはじめたな、と思つたときに戸はノックされた。

## 五

美しいお鯉——わたしは手箱に秘めてあつたものが、ほどへて開いて見たおりに、色も褪あせずにそのままあつたように、安心と、悦びと、満足の軽い吐息が出るのを知つた。

お鯉さんは朝のまままで、髪も結いたてではなかつた。別段おめかしもしていなかつた。

無地の、藍あゐむらさき紫むらさきを加味したちりめんの半襟に、縞のふだん着らしいお召と、小紋に染めたような、去年から今年の春へかけて流行はやつたお召の羽織で、いったいに黒くろずんだ地味な

つくりであつた。

かわらないのは眉から額、富士額の生際はえぎわへかけて、あの人の持つ麗々しい気品のある、そして横顔の可愛らしさ、わたしは訪ねて来て、近々と見ることの甲斐かいのあつたのをよろこんだ。

それに、わたしの目をひいたのは第一に束髪であつた。かつてわたしが、束髪のお鯉を見たときは安藤てる子さんとして紹介されたので、桂公爵に仕え麻布に住んでいたおりのことであつた。

思出はさまざまに、あとからあとからと浮みあがってくる、その折お鯉は何事も思うままで、世の憂きことなどは知ろうようもないと思われた時代である。花の三月、日本橋倶楽部クラブで催された竹柏園ちくはくえんの大会の余興に、時の総理大臣侯爵桂大将の、寵おもいもの娘おんなの、仕舞しまいを見る事が出来るのを、人々は興ありとした。金こんばる春流の名人、桜間左陣翁さくらまざましんが、見込みのある弟子として骨を折っておしえているというこの麗人が、春しゅん日にちの下に、師翁の後見で「熊野くまの」を舞うというのであつた。

「熊野」とは、「熊野」とは——その意味の深いことよ。

うつくしき人は、白き襟に、松と桜と、濃淡色彩いろよき裾模様の、黒の着附けであつた。

輝くばかりの面に、うらうらと霞めるさまの眉つき——人々は魅しきられた。

——春前に雨あつて花の開くる事早し。秋後に雲無うして落葉遅し。山外に山あつて山尽きず。路中に道多うして道極まりなし「山青く山白くして雲来去す。」人楽しみ人愁ふ。これ皆世上の有様なり……

ひるがえる袖、ひらめく扇。時と人のよくあつて、古えを今に見る思いがした。

噂というものは、いかにあろうとも、軽率な侮蔑を、同性の人にむかつて投附けるほど、向う見ずな勇気をもたないわたしは、ともすれば、その人の心の真を知らないものが、反感をもつて眺めるであろうと思う束髪を見て、かえつて気が楽になったように思った。なぜならば、切髪というものは、昔は知らず今の時代では、空々しく思われなくてもない、日頃思つていたからで、形において、夫にさきだたれた独身者であるということを、証明する必要のないものは、かえつて人目に立つて、異様な粧いをこらす結果とあまり違わないことになるからだつた。ことにとやかくと、人が噂にのぼせたがるものがそうした姿かたちをするのは、猶更注意をひきやすいと思つていた。

わたしはこう言った。

「貴女が今までに、あんまり間違つたことを言われるとお思ひになったことをきかせて下さい。新聞や雑誌に、お名前の出たところはたいてい読みましたが、そういうものはみんな忘れる事にしました。聞き噛かつたことを興味で書かれてはたまりませんし、読む人は、他人の苦痛はいくらでも忍耐が出来ますから、面白い方をよろこびますものね」

彼女は答えた。

「本当に——最初はしめはくやしいと思つても、段々馴なれて、それに反抗心も出て、勝手になんでも言うが好い、いくらでも書くが好いという氣になつて、意地悪になつてしまつて……」

## 六

彼女の頬ほは、暖炉や飲のみ料もののためではなくカツと血の氣がさした。それを見ると、わたしは氣持なちがすがすがしくなつて、お鯉なますは生なましている、生作りの膾なますだと、急に聞きく方も、ぴんとした。

「あたしは貴女にいろいろ聞ききたいことがあるのですが、みんな後のちにしてしまつて、桂けいさ

んに御死別おわかれになつたあとのこと——さぞ、世評は誤解だらけでしょうから、ありのままのことをお話して頂きたいのです」

わたしが無作法にも、訪問記者のようなことを言出したのは、あの頃——桂侯爵の逝去ののち、愛妾お鯉に、いくら面会をもとめても家人が許さなかつたというような新聞記事を見ていたからであつた。気の弱いわたしはそこまで立入つた間とは心がゆるさなかつたので、その真偽は聞きもろしたが、思いがけない面白い——面白いといつてはすまない、その人にとれば、いままで、善を悪として伝えられ、白を黒と発表されていた事柄なのだけだ。お鯉という女の真意は、かくのごとく清く滞らないものであるということ語るには、ありのままを記しるそう。

この女ひとも意気の女だつた。何もかも振りおとして、重荷をはらつてしまおうと思うと、慾も徳も考えない気短な、煩うるさがりやの、金錢に恬てんたん淡な感情家なのだつた。わたしは、自分にも、共通の弱点のあることを考えてほほえんだ。痛快にも思つた。

人はあるいはいかも知れない。些細ささいな感情などに動かされて、利害を忘れ、長き後のちの悔くを残すと——けれど、もしそういう人があつたならば、わたしは誇らしく面おもてをあげていうであらう。冷徹な理性の人にも失敗はある。感情に激しやすくつても失敗はある。いず



れが是、いづれが非と誰れが定められよう。感情の複雑な人ほど、美人は人間的の美をますと――

彼女は白い手に銀の小刀をとった。赤い柿の皮が細く綺麗につながってゆく。エメラルドは指に碧く、思出は彼女の頭の中をくるくると赤く、まざまざと巻返えされていると見える。彼女の眼の色は早春の朝のように澄んで冷たく、初夏の宵の、明星のように瞳は熱つぽく輝いた。

「わたしに残して下さった遺産は七万円からあつたのです。それから三人の子供をわたしの子にしていたのです。そうして残されたものが、わたしのものではないように、他人がとやこういつて、肝心のわたしが頭をさげて利息をすこしばかり貰いにゆくという、おかしな事がありましたでしょうか？」

そんなばかなことをと、誰しもがその時答えるであろう。ましてわたしには、数字は違っているが、そんな運命にあつて、二人の男の子を抱いて、物価騰貴のおりから苦しんでいる妹を持つているので、他人ごとならず感じられた。此処にもそうした女性があるのか、女というものはどうしてこうまで虐げられ、自己の権利を蹂躪されるものかと怒りがこみあげてくるのであつた。

そのおり令妹のしげ子さんがはじめて口をはさんだ。

「わたしは姉ともう五年一所に暮しています。はじめは、姉が寂しい気持ちのドン底にいた時に、わたしというものを思出して呼びよせたのです。わたしと姉とは、まるで育ちも境遇も違うので、行つてもどんなものかと思つたのですが、来て見ると、聞くで見るとは大違いなので離れる事が出来なくなりました。あの時は、全く姉は孤立で、真に心淋しかったのだらうとよく思出します。世の中の噂のようなことが本当ならば、わたしは志望した道を投捨なげすててまで、五年間もこうして姉さんをたすけていやあしません。姉さんの犠牲になつて、こうした商業しょうばいの帳付けや監督になんぞなりはしません」と、しみりと言つた。全く彼女にはそう思えたに違いない。秋田で育つて県の女学校にはいり、女医を志望していた人には、あまりな商業しょうばいちがいである。

「全くこの妹には気の毒だつたのですけれど——この妹でもいてくれなくっちゃ、——この家業だつて、ビールか葡萄酒ぶどうしゆでなくつては、西洋のお酒の名さえ分らないのではねえ」  
お鯉は眼をふせて面伏おもてふせそうに笑つたが、

「わたしにしてもよくよくだつたのです。姉さんが気の毒でとても離れられなかつたので、一緒にいろいろ心配もしましたが、その頃のことにはわたしも知りませんでしたけれど、あ

とで聞いて見ると、姉は、自分の事は自分でする、他人の差図さしずやお世話にはなりたくない  
 と思つていたらしかつたのですね」  
 という令妹の言葉に頷うなずいて、

「ええ、そうなの。そうではないの、あの方だって、誰の差図をうけるのどのとは仰し  
 やらなかつたし、もともと遺産といつても、あの方がおなくなりになつてから、御本邸の  
 方の財産をへらして分けて頂くのでもなんでもなかつたのですもの」

「では、もともと貴女のものとしてあつたのですか？」

わたしはもうへだてもわすれて、率直に自分の聞きたい方に急いだ。

「広太郎という御子息がありましたの、その方の事は大層信用していらつしやつたので、  
 俺おれが死んだらば、直にこの手紙を子息むすこのところへもつてゆけ、そうすれば、何にも言わな  
 くつても、すっかり分るようになって仰しやつて、表おもてが書きにその方の名前を書い  
 た文ふみが出来ていましたのですけれど、その方かたのほうが先へおなくなりになつてしまつたの  
 で、それで面倒くさくなつたのです。すつた、もんだで、一年半というものは実に嫌いやな月  
 日をおくりました。その間の苦しみて、困つたの困らないのつて、お話にやなりません  
 何しろその金へは手が附けられないのですものね。三人の子供と、二人の老母ははと、十人の

召使いとがいて、以前の家に住んでいたのですもの」

おお、その時であろう、お鯉さんが貧乏していると伝えられ、あるものをみな手離しているといわれ、それはみんな彼女のふしだからだなど噂されたのは――

「それもね、わたしが強情ごうじょうで、井上さんと喧嘩けんかをしたからですの。だって強情にもなりますわ、意地も悪くなりますわ、困らしたら彼女頭あいつをさげてくるだろうと、弱いものいじめをなさるから、わたしはどうしても屈服することが出来なくなつて、苦しい意地も張るようになったのです」

「では、その財産をどうしようとする先方むこうではいったのですか？」

「利息だけで暮らせ、それを毎月貰いに来いというのです。それには大変な個条書きが附いていて、それで承知ならば実印を押せというじゃありませんか。その個条書きつたら、ほんとにばかばかしくつて、とてもあたしには、さよう御座いますか、承知いたしましたとはいえないのですもの。今度出しておいてお目にかけますようね、その個条書きつていうのを、あたしはちゃんと取つてあります。あんまりおかしいから、あたしは立派に張つて巻物にしておこうと思つていますわ。しかも、あたしは押しやあしなないけれど、立会人になつた、立派なお歴々の判はおしてあるのですの」

「随分ばかげた事ではありませんか、そんな騒ぎをして、後に渡してよこした時は、七万からのものが五万いくらかになつていましたつて」

と、しげ子さんもいった。私も、

「井上伯とか侯とかは、そんなばかばかしいことでもしていなければ用もなかったのでしょうか、一体まあ立会人というのが誰なのです。随分世の中には暇な人が多いと見えますね、たのまれもしないことを」

「本当に頼まれもしないことをです。残していつて下さった方は、頼みもなんにもしないことなのに」

「やろうというのは、その者に充分につかわせたいからなのは分っているじゃありませんか。何だつて余計なことをしたものでしょうね」

「本当に貴女の仰しやる通りよ。そのお金だつて、いちどきに沢山儲ける実業家ではなし、大臣は貧乏だつたから、なかなかあれでも心にかけて積んでおいて下さったのです。よいなものが出ると、これはお前の分にして銀行へ入れておいてやろうといたり、臨時のことで株券なんぞが手にはいると、お前のものにしておいてやるからといって、その場で下さるものを銀行へ入れておいたただけだったのです。ですから当然自分のものだと思つ

ていたのです。それをいくら問いあわせても返事をしてくれずにほっておいたのちに、井上さんへ呼ばれるといまの話——個条書きの一件なのです。

一 貞操を守る事、

一 子供の教育を自儘じまになさざる事、

一 犯みだりに外出いたすまじき事、

そんなことを読みあげて判をおせつて……」

語るものも、聞くものも、顔を見合せて失笑した。

「あたし夫人おくさんじゃない、妾めかけですつていつてやったの」

なんとという簡にして要を得た、痛快な答えではないか？

## 七

「そうすると怒ったのおこらないのつて、あの有名な癩癩かんしやくだま玉たまでしょう、それを破裂させたのです。馬鹿ツ、貴様はツて怒鳴ったのですけれど、あたしやあ怖こわいことはないから言つてやりましたわ。第一貞操を守る事なんて、そんなこととても出来ません。わたくし

は若いのですし、旦那はおかくなつたのですから、これからのことはわたくしの自由では御座いませんか、そんなお約束はうっかり出来ません。出来ることならばいたしますが、わたくしにはとても出来ないと思いますからいたしません。明日の心さえ自分でわからないほどですもの、長い一生をかけて、どうしてそんな、とんでもないお約束が出来るものですかつて、いつてやつたんです」

それは甚く雪の降つた日のことであつたという。座には早川千吉郎、益田ながし、その他錚々たる顔触れが居並んでいた。その中へ引きいだされた彼女は、慾を捨ていたのでそれが何よりもの味方で心強かつた。彼女はこじれた金などはもう取りたくなかつた。それよりも早く自由な身になつて桎梏から逃れたかつた。

雷が鳴る——はらはらしたのは仲にたつ人々であつた。世外侯の額の筋がピカピカとすると、そりやこそお出なすつたとばかりに、並居る人たちは恐れ入つて平伏する。そして小声で、悪いようには計らわれないから、御尤もと領ずいてしまえとすすめる。

「あなた方は、あの方を怒らしてしまふと後の恐いことがあるからでしょう。あたしはちつとも恐かないから嫌だ」

ここにおいてお鯉の目には明治の元勳井上老侯もなければ、財界の巨頭たちもないので

あつた。たかが女一人を——その財産を、自由を、子供の教育を、何もかもを、女と侮つて、寄つてたかつて、何のために押えつけようとするのであろう。それも旦那の生前に頼まれていたとでもいうのならいざ知らず、横合よこあいから飛出して来たおせつかいである。

千金の壺つぼだといつても、その真価を知らぬものには三文にもあたいたくない代物しろものとしか見えない。さすがの老侯も物質尊重のお歴々には、あがめたてまつられている御本尊であるが、お鯉にとつては、おせつかいな世話やき爺じじいに過ぎない。世外せがいどころか、おせつかいにも、他家よその台所の帳面まで取りよせて、鼻つまみをされる道楽があつた。天下の台所の世話やき、お目付けは結構でも、老いては何とやらの譬たとえ、ついには他人たにんの妾めかけの台所まで気にするようになられたものと見える。

さはあれ引つ込みのつかなくなつたのは、実に思いがけない事であろう。天下に、この俺おれにむかつて楯たてをつくものがあるかと思つている鼻さきを、嫌いやというほどにへし折つて、そのあげくの口上くちがしがこれである。

「面倒くそうございますから、なにもかもみんな御前ごぜんに差上げます」

そして目録を書いてある遺書を、さっさとおいてお鯉は帰ってしまった。



お鯉の家の門前は急に人足が茂くなつた。手をかえ品をかえ、温顔に恐こわおもて面に、さまさまの人が、さまさまの策略をめぐらして訪問するのであつた。慰問使、媾こうわ和使、降伏説得使なのである。鯉の頭は猶なわさら更下ろうとはしない。その多くのなかに異色ある者が二人あつた。男女互に一人ずつ、共に有名な人物である。

女は当代の名物女とゆるされた故「喜楽」の女将おかみおきんであつた。男は政界の名物ほら法螺丸まると綽名あだなをよばれた、杉山茂丸という人である。

杉山は度々仲にはいつて足をはこぶうちにお鯉のいうことに耳を傾けるようになった。そしてその方が理窟のあることだと同情してしまつた。つまり説得するものが説破せつぱされたのである。この人はお鯉の利益になるように説くようになった。そこで、喜楽の女将が、我こそと手ぐすねをひいて出て来たのだ。自分でなければ、ああひぞつてしまつた女を、説とぎつ附ける腕はないと信じて現われた。

喜楽の女将のいっかつ一喝にあえば、多くの芸妓は縮みあがつてしまふ勢いがあつた。流行はやりつ妓こになるのも、よい姐ねえさんになるのも、お披露目ひろめに出た時、女将の目にとまつて、具合よく引っぱり廻され、運の綱を握るようにしむけてくれるからである。で、たいていな妓は、喜楽の女将の言うことに逆らわなかつた。けれども、そのおりのお鯉は、とてもそう

した威しでは駄目だと炯眼な女将は見てとつた。

ある日女将は輪袈裟をかけ、手に数珠をかけて訪ねて来た。切髪となっていたお鯉は、越前永平寺禅師となつて、つい先の日遷化された日置黙仙師について受戒し参禅していたが、女将もその悟道の友であつた。ものものしくも、いしくも思いついた姿でやつて来た女将は、

「今日は平日のあたしじやあない。この姿を見て下さい。この袈裟の手前としても、いざこざなしに話をしましょう」といった。それに答えたお鯉は、

「本当に女将さんよくその姿で来て下さつた。それならば、あたしは貴女を、真に打解けてよい人だと思つて、ほんとうにはなし好いわ。貴女だつて、まさか、そうしてまで来て下さつて、皆とおんなじようなことはおつしやるまいから」

そういうと女将は変な顔をしてしまった。そして、これはしまったというように、

「そんな事いつちや、あたし困つちやうね。そんなつもりじやなかつたのだよ。こうして来たならば、あたしのいうことを何でも聞くかと思つてき」と化の皮を現わしてしまつた。

「そりやあいけないわ女将さん。ふだんの姿だなりとあたしにも義理があるけれど、袈裟をかけていて下さるとほんとに話好いのだから。第一あなたも苦勞人じやないか、先方のいうことばかりを聞いて、こつちになつて考えてくれないからですよ。よく思つて見ておくなさい。誰が一番可哀そうなの、旦那には離れるし、これからさきどうしてゆこうと苦勞しているものの身になつて考えて御覽なさい。貞操を守れつたつて、はい守りましようといつて守れなかつたらどうするの、かえつて恥じやありませんか？ そんなことは約束するものじやありますまい。それから子供のことだつて、十二人もある子供で、腹違ひが多から、お前の子として育つて来たものを、また他ほかの者の手へ渡しては子供が可哀そうだからと、すつかりあたしの子になさつたのを、誰に教育をたのもうというのでしょうか。犯みだりに外出をいたさぬ事というのも、あんまり人を人間でないように思つているじやありませんか、旦那の在世のうちだつて、一々本邸へ電話をかけて、許しをうけなければ一足も外へ踏みだせなかつたので、つい面倒くさいから芝居ひとつ見ないようになつてたじやありませんか。これからこそ、氣樂にして暮したいと思うのに、なんだかんだと煩うるさい事を聞くのも、それもお金があるからだ、つくづくほしくなくなつちやつたんです。もともとあたしのものなのだから井上の御前にあげましようつて言うだけなのですわ」

「そう言われればそうだけれど、あたいは困っちゃったね」

困っちゃったと口にはいつても、言われないとこまでも女将の胸には梁みたのであろう。なぜならば、わたしは或折この女将の洩した歎息と、述懐を聞いたことがある。

「あたしはありとある愁い経験をもつていて、いろいろな涙の味を知りつくしている。だから、どんな芝居を見ても面白い、感動する。なぜならそのどれにも共鳴するものを嘯みつくしているからだ」

といったようなことであつた。あの根上りの飛上つた小さな丸鬚が、あの人の一面を代表しているようには見えだが、あの鬚の下にも、眞実はかたまつて残つていたのである。彼女もまた動いてしまった。

## 八

そんなこんなで麻布を引払い、大井の方へ移つた。大井の里の家は、かなり手広なのと、すこしはなれて、梅や桃を多く植廻した小家との一軒をもつていた。狭い方のへ老母たちが住い、広い方へ子供とお鯉と、秋田から出京したしげ子とが住んだ。

「姉は子供が好きだったので、みんな慕っていましたが、今では三人とも手離してしまつて、淋しいのを紛らすために六歳になる女の子を貰もらつて育てています」

「柳橋から来ていた大きいのは縁附きました。も一人の女の子は十二の時に、桂二郎さんに引とられこの間それも縁附きました。その子は幼少ちいさいうちから手塩てしおにかけたので、わたしを何処までも母だと思つているのです。二郎さんのところへ訪ねていったら、あたしの事を、あちらの御夫婦へ大層きがね気兼ねするので、気が痛んで来て、それから行かないようになりましたの。あれを手離した時のさびしさといつたら……」

暗然と、聞くものの胸にもじむものがある。

「男の子は安藤の家督にしてあるのですけれど、その子の母に連つれあい合があつて、生みの母の縁から深く附合つきあうようになったところ、なにしろその子の義父ちちだといふので、何かと家の事へも手を出したがるし口も出すのです。それやこれやの迷惑は一通りじやなかつたので、種いろいろ々と世間からもあたしが誤解されたり、大井の広い家も売つてしまうようになって、そのかわりに、家ごとその子も先方へ持つていったのです」

「五万円のうち一万二千円ずつ三人の子につけて渡したのですからあまつたのは幾らもありはしません。それで桂さんの死後、ざつと十年たらず今日まで過して来たのですね。も

う今は残っていません、何にもなくなつたから 商 業しょうばいをはじめたのですね、ねえ、姉さん」

「母もなくなりまして、残っていた養母も去年なくなりました。木からおちた柿のように、ほんとの一人ぼっち——けれど此妹これがいてくれたので……」

暫時しばし、三人は黙した。ケンチャンが白いものを着て、髪くしの毛にも櫛くしの齒くしを見せて、すましかえつて熱い珈琲コーヒをはこんで来た。三人はだまって角砂糖を入れて搔かきまわ廻まわした。

「姉の考えでは、残しておいて下さつたもののあるうちは、何にもしないで、旦那の余光で暮してゆこうとしていたらしかつたのです。そうだとは言いませんが、どうもそういう考えらしかつたのです。何にもなくなつた時に、その時にお鯉にかえるのだと思つていたのでと思います」

「あたし、みんなに生別れたり死別れたりして、何もかもなくなつてしまつた時に、今日から自分の生活になるのだと、しみじみと思ひましたよ。けれど、待合まちあいや、料理店をはじめると、分明はつきりした区別がないので、あんな風になつたと思われまますから、はじめのならいっそ、みんなから見張つてもらつてゐるこんな商 業しょうばいの方が好いと思つて、この株式の専務ということになりました」

「貞操を守れの、守らせるの、いや守れないのといったって、姉の所行はわたしは見て来ています。こうして立派に過して来たのですから」

しげ子さんは客が来て中座した。そのおりをよき時と、そこにいられては聞きにくいことをきいた。

四谷よつやで生れていまもあの辺に住んでいる女から、お鯉の生家は、いま三河屋みかわやという牛肉屋のある向角むこうかどであったというのを聞いたことがあったので、さまざまに取沙汰とりざたされている、この女の生れを聞定めききさだめようとした。そしてしげ子さんのことも——。するとその事が本当であつて、三河屋が親切にその家のあとも引取つてくれたのだといった。

「家の退転ほろびるとき時が来たのでしようか、漆屋というものは、漆のあわせかたがむずかしいもので、秘伝のようになつていたそうです。わたしを生ませた父が養子に来て死ぬころまでに、数代つづいたますやの店もいけなくなりました。妹の父が来ても家をゆずらなければならなくなつて、わたしは安藤へ養女にやられ、妹は両親と、秋田の鉾山へいつてしまつたのです。後に母が病身になつたと聞いたのでわたしの方へ母を引取りましたのです。秋田には多勢の子供がありますから、あたしにはたった一人の妹を無理に貰つて、実家の片

岡の方の家をつがせることにしました。おかげさまと、どうやらこの店もやってゆけます。株式をやめて、わたくしの店にしてしまうような相談もあります。一、二年もしてやってゆけば、妹に譲って、わたしはわたしの何か仕事をはじめようと思つています」

長椅子の方へ来て、くつろいでこんな打明けばなしをしてから、御免なさいといつて、はじめで巻煙草まきタバコの一本をつまんだ。

お鯉さんのこれからの生活は、かなり色の褪あせた、熱のないものであろうとその時わたしは思った。彼女は羽左衛門と、三下りさんさが、また二上りのにあが、清元きよもと、もしくは新内しんない、歌うたぎ沢わの情緒を味わう生活をもして来た。巨頭宰相の寵ちゆうあい愛を一身にあつめ、世の中に重く見られる人たちをも、価値なきものと見なすような心の誇りも知つて来た。いかなるものが現われ来て、この後の彼女を満足させるほどその生活を豊富にするであろうか？ それは疑問だ。何にしても彼女の過去が、あんまり光彩がありすぎた。あざやかすぎた。とはいえそれを救うのは、純潔なる魂の持主、熱烈な情熱と、愛情でなければならぬ。彼女が、生来まだかつて知らぬ、清純な恋そのものでなくてはならない。が、悲しいことに、いたずらに費消された彼女の情熱は、真純さを失つて、彼女の外見のかたちよりは若さを消耗している。



彼女が子供好きで、子供がなくてはさびしくていられないという心持ちは察しることが出来る。子供ほど彼女の複雑な気持ちを書さないものはないであろう。彼女の真の慰安は——友達は、無邪気な子供よりほかないであろう。

お鯉さんとはなしをしているうちに、その声に、いろいろと苦勞をした人だと思わせられる響きを感じた。美人と境遇と声音こわね——これもこの後心附けなければいけないと思った。それから、お鯉さんには、わたしが気にかかる二本の横筋が咽喉のどにあった。ほんにこの筋のある美女で苦勞を語らない人はない。

考えると人生はさびしい。そしてむやみに果敢はかなくなる。

——大正十年一月——

昭和十年附記 昨年赤坂田町の待合「鯉住」の女将として、お鯉さんが某重大事件の、最初の口火としての偽証罪にとわれ、未決に拘禁されたのは世人知るところであり、難髪ちはつして行脚あんぎやに出た姿も新聞社会面を賑にぎわした。おお！ 何処までまろぶ、露の玉

やら——



# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1921（大正10）年1～3月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一世お鯉

## 長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>